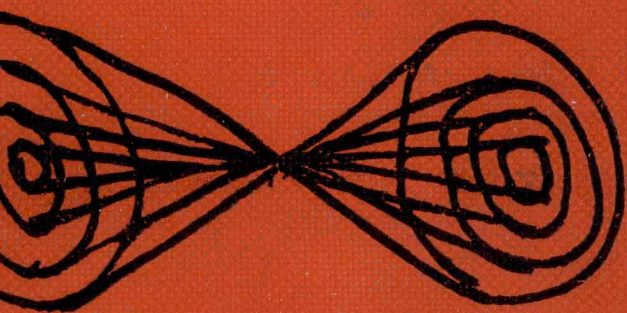


カ フ カ

世界文学大系



58

カ フ カ

審判 城 変身 流刑地で 火夫
判決 皇帝の使者 家長の心配
最初の苦悩 断食芸人

原 田 義 人 編

世界文学大系

58

筑摩書房版

世界文学大系 58

カ フ カ

1960年4月10日初版第1刷発行

1970年6月5日初版第26刷発行

訳 者 原 田 義 人
辻 人 理

発行者 竹 之 内 静 雄

発行所 株式会社 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町2の8

振替東京 4123 電話 (291)局 7651

郵便番号 101-91

(分類) 0397 (製品) 20058 (出版社) 4604

目次

審判

城

短編

変身

流刑地で

火夫

判決

皇帝の使者

家長の心配

最初の苦悩

断食芸人

辻

原田義人訳

原田義人訳

理訳

134 5

341

373

391

409

417

418

419

421

年	解	カ
譜	説	フ
		カ
		論

装
幀

庫
田

發

原	原	ウ
田	田	イ
義	義	リ
人	人	・
		ハ
		ス
449	439	428

カ

フ

カ

[illegible]

審判

第一章

逮捕・グルーパツハ夫人との対話、それからビュルストナー嬢

だれかがヨーゼフ・Kを中傷したにちがいないかった。なぜといって、何も悪いことをしなかつたにもかかわらず、ある朝彼は逮捕されたのである。彼に部屋を貸しているグルーパツハ夫人の料理女が、毎日朝の八時までには朝食をとどけにきていたのだが、それが今日に限ってやつて来なかつた。これは今までついぞなかつたことである。Kはそれでもまだしばらく待ちながら、枕に頭をうずめたまま、向い側に住んでいる老婆が、この女にはおよそ見なれぬ好奇の眼で、自分を観察しているのを眺めていたが、やがて不審に思うと同時に空腹も感じてきたので、呼鈴をならした。たちどころにドアをノックする音が聞こえ、この家ではまだ一度も見かけたことのない男が入ってきた。すうりとしてはいたが、頑丈どろどろそうな体格で、体にびったりと

合う黒い服を着ていた。旅行服に似たもので、さまざまなひだやポケットや留め金やボタン、それにバンドもついており、そのせいで、何のためかは判然としなかつたが、いかにもものの役に立ちそうな実用的な服に思われた。

「どなたです？」とKはたずね、すぐベッドの上で上半身を起こした。

しかし男は、自分が現われたところで文句をつけることはなからうとでも言わんばかりに、この質問を聞き流し、逆にただこう聞いてきた。「呼鈴を鳴らしましたかね？」

「アンナに朝飯をもつてこさせたいのです」とKは言い、はじめは黙つたままで、よく見てよく考え、この男がいったい何者であるのかを確かめようとした。しかし男のほうは、そんな視線に長いあいださらされてはいかず、ドアのほうに向きを変えて、これを少しあげ、そのドアのすぐ後ろに立っているにちがいないだれかに向つて、

「アンナに朝飯をもつてこさせたいのだ」と言つた。

隣りの部屋でちよつとした笑い声が上がつたが、その声の響きぐあいからでは、幾人かの人が笑つたようでもあり、そこははっきりしなかつた。こんなことで、今までわからぬことがわかつたはずもないのだが、それでもその見知らぬ男は、今度はKに向つてまるで通告でもするかのような口調で言つた。

「それはだめだ」

「そりやあ変だ」とKは言つて、ベッドから飛びおり、いそいでズボンをはいた。

「隣りにどんな連中がいるのか、それにグルーパツハ夫人が、こんな妨害の責任を、どうやつてとってくれるものか、それを知りたいものだ」こんなことを大声で言う必要はなかつたし、それにこれで幾分か、この見知らぬ男の監督権を認めてしまったことになるとはすぐに気づいたが、それも今の場合たいしたこととは思へなかつた。とにかく見知らぬ男のほうはそう思つたらしく、こう言つた。

「ここにいたほうがよくはありませんかね？」
「ここにいたくもなければ、あなたに話しかけられたくもないんだ、あなたが名前を名乗らぬうちはね」

「好意で言つたんですよ」と見知らぬ男は言い、今度は自分からドアをあけた。

Kが心ならずもゆつくりとした足どりで、隣りの部屋に入つてみると、ここは一見したところ、ほとんど前の晩のとおりに見えた。グルーパツハ夫人の居間であり、ただ家具や覆いや陶磁器や写真でいづばいになったこの部屋が、今日はいつともより片づいて少しばかり広くなつてゐるかもしれない。しかし、これはすぐにそれと見てとれる変化ではなかつた。というの、すぐに目に映つた主な変化といえ、一人の男がそこにいたということだつたのだ。その男は開いた窓のところで、本を読みながら坐つており、今その目を上げたところである。

「部屋から出てはいけないのに！ フラントが
そう言いませんでしたか？」

「聞きましてよ、いったいどうしようというん
です？」とKは言い、この新しい知合いから目
をうつし、フラントと呼ばれた、戸口に立った
ままでいる男を見ると、またその目をもとに戻
した。

開いた窓越しに例の老婆が見えたが、これは
一部始終を見とけるために、いかにも年寄ら
しい好奇心で、今また真向いにあたる窓へと
歩みよっていたのである。

「どうしてもグルーパー夫人に——」とKは
言い、実のところは遠く離れて立っている二人
の男から、まるで身をもぎ離してもするかのよ
うな仕草をしてみせ、そのまま先に歩いて行こ
うとした。

「いかん」と窓べの男が言い、本を小机に投げ
て立ちあがった。「行つてはならん、あんたは
逮捕されたんだ」

「そうと見えますな」とKは言い、「ところで
いったいなぜなんです？」

「われわれはそんなことを答えるために雇われ
ちゃあいないんだ。部屋に戻って待っていたま
え。訴訟はとにかく始まったんだから、時さえ
くれば万事間違ひなく知らせてもらえるはずだ。
こんなに親身になって話してあげるの、わた
しの任務外のことなんだぜ。だがフラント以外
には聞いている人もいなかろうし、奴自身から
してが規定を犯して妙にあんたに親切なんだ。

こんないい監視人が決ったときのようにな、今後
もあんたが幸運にめぐまれるなら、あんたも大
いに自信を持つていられようというものさ、

Kは坐ろうとしたが、さて見廻してみると、
窓ぎわのひじかけ椅子のほかには、坐るところ
がなかった。

「私の言つたことはいまにみななるほどと思ひ
当たるさ」とフラントは言い、それと同時にも
う一人の男といつしよにKに向つて歩いてきた。
とくにこの男のほうはKよりずっと背丈が高く、
よく彼の肩をたたくのだった。二人はKの寝巻
を吟味して、あんたはこれからもつとずっと悪
い寝巻を着なければならなくなるだろ、しか
しこの寝巻もほかの下着類といつしよに、われ
われ二人で保管しておいてやろう、そしてあん
たの一件が首尾よく解決したら、また返してや
ろう、と言うのだった。

「品物は保管倉庫に入れるよりわれわれに渡し
たほうがまだよ」と彼らは言つた、「保管倉
庫じゃあよく横取りされちまうことがあるし、
おまけに一定の期間が過ぎると、その訴訟が終
つていようがいまいが、それにはおかまいなし
に、みんな売つぱらつてしまふんだ。それにこ
ういった裁判沙汰はひどく長くかかるんだ、こ
の頃はとくにそうだがね！ 最後にはもちろん
保管倉庫から売上げをもらうことになるだろ
うが、この売上げというやつは、第一に、もとも
とごく僅かなものなんだ。というのも売却のと
きには、買手のつける値段できまるんじやなく

て、賄賂の高できまるんだ。そこにもつてきて
この売上げが長い年月手から手へと渡されてい
れば、またぞろ減つてゆくのが定石さね」

Kはこんな話にはほとんど耳をかしいていな
かつた。自分の品物を自由に処理しうる権利は、
まだ失われてもいなさそうだったが、彼にとつ
てそんな権利はたいしたことではなく、自分の
置かれてゐる状態をはっきり知ることのほうが
ずっと重要だったのである。しかし、こんな連
中を眼の前にはいては、考へてみることにさ
でなかつた。第二監視人——二人とも監視人
以外のものではありえなかつたが——の腹が、
親身のあまりとでも言わんばかりに、しよつち
ゆう彼につきあたつてくるし、といつて見あげ
てみれば、この太つちよの体にはおよそ似つか
わしくない、ひからびて骨ばつた顔があり、そ
こに豪勢な、横にねじれた鼻がついていて、そ
の顔が彼の頭越しにもう一人の監視人と意を通
じあつてゐるのであつた。いったいこれはどう
いう男たちなのだろう？ 何のことを話し合つ
てゐるのだろう？ どういう役所の者なのだろ
う？ だつてこのおれは法治国に住んでゐるの
だ、国じゆうが平和だし、法という法はすべて
敵然として存在してゐるのだ、ひとの住居にふ
みこんで、不意を襲うようなまねをするとは、
いったい何者なのだ？ 何事もできるかぎり気
楽に考え、最悪の事態は、その最悪の事態その
ものが現われてからはじめてこれを信じ、たと
え雲行きが非常に怪しくなつてきたときでも、

格別なにも将来のための措置などは講じておかないというのが、常日頃の彼だった。しかし今度ばかりはこういった彼の傾向が正しいものとは思われなかった。なるほどこの事件を冗談、それも理由はわからぬが、もしかすると今日が彼の三十歳の誕生日だということで、銀行の同僚たちが仕組んだ粗野な冗談だとも取れなくはなかった。もちろんこれはありそうなことだ。どうかして面と向って監視人たちを笑ってやれば、それで済むことなのかもしれない、そうすれば連中もいっしょになって笑いだすだろう、二人は町角の使い走りの男たちかもしれない、そういうええ何だか似ているようじゃないか——しかしそれにもかかわらず彼は今度の場合、文字通り監視人フランクを最初に見たその瞬間から、この連中に対して自分が持っているかもしれない有利な点は、どんな僅かなものでも、絶対に手放すまいと決心していたのである。後になって、冗談を解さない奴だ、と言われるかもしれないが、そんなことはごく小さな危険としか見えなかった。それより彼が思い出したのは——経験からものを学ぶなどというのは、今まで彼の習慣ではなかったのだが——二、三の、それ自体としては格別取るにも足らぬ事件であった。意識的に事を運ぶ友人たちとは異なり、どんな結果になるだろうかなどということとは、一向に気にとめず、不用心な振舞いをしたために、事の結果そのものが天罰となつてしまつたことがあるのだ。こんなことは二度とくり返してはならない、少なくとも今度は絶対にだ。これが喜劇であるのなら、逆に自分も一役買つて出てやろう。

彼はまだ自由の身だった。「失礼」と彼は言つて、二人の監視人のあいだをいそいで通りぬけ、自分の部屋に入つた。

「ものわかりはよさそうじゃあないか」と言う声がかうしるに聞こえた。

部屋に入るとすぐさま机の引出しをひきあげた。引出しの中はよく整理が行きとどいていたが、興奮しているため、他ならぬ目ざす目的の身分証明書がなかなか見つからない。さうとうと自転車登録証が見つかつて、それを持って監視人のところへ行こうとしたが、この書類ではあまりに貧弱すぎるように見えたので、思いなおしてまた探し、やつと出生証明書を見つけた。彼がまた隣りの部屋にもどつたとき、ちょうど向い側のドアがひらき、グルーパツハ夫人が入つてこようとした。姿を見せたのはしかしほんの一瞬間だった。というのも、彼女はKの姿を認めるやいなや、目に見えて狼狽し、ごめんなさいとあやまつてひっこむと、慎重そのもののようによろしくドアをしめたのだった。

「どうぞお入りください」とKはとつさの場合、やつとそれだけ言えただけだった。書類を持つて、きょとんと部屋のまん中に立ち、まだこのドアをながめていたが、そのドアは二度とはあかず、監視人たちに呼びかけられて、はじめてびっくりとびあがる始末だった。監視人たちは小さな窓ぎわの机につき、Kが今気づいてみれば、彼の朝食を平らげているのである。

「なぜあの人は入つてこなかったんです？」と彼はたずねた。

「禁じられてるんだ」と大きいほうと言つた、

「何しろあんたは逮捕されてるんだからね」

「いったいどうして逮捕されることがあるんです？ おまけにこんなやり口で？」

「またぞろはじまりましたな」とその監視人は言い、バタパンを蜂蜜の入れ物にひたした。

「そういう質問には答えませんよ」

「いいや、答えてもらいましょ」とKは言つた、「これが私の身分証明書です、次はひとつあなたの証明書を見せてくれませんか、それに何よりもまず逮捕令状をね」

「こんでもないこつた！」と監視人は言つた、

「往生ぎわの悪い奴だ！ それに見受けたところ、えりにもえつてこのわれわれを、あんたは益もなく怒らせようとしているようだな！ われわれは今ありとあらゆるあんたの同胞のうちで、いちばんあんたの身近かにいる二人なんだぜ」

「そうなんだ、言うとおりでござい」とフランクが言い、手にしたコーヒー茶碗を口には持つてゆかず、長いこと、意味深長らしくはあるがわけのわからぬまなざしで、Kを見つめた。思はずもKはフランクと眼つきで問答をかわすことになつてしまつたが、やがてしかし証明書を叩いて言つた。

「これが私の身分証明書なんだ！」

「そんなものがわれわれに何の関係があるんだ」と大男の監視人はもう声をはり上げて言った。「子供より始末の悪い奴だ、いったいどうしてほしいんだ？ われわれはただの監視人なんだ。その監視人と身分証明書だの逮捕令状だの、そんなことを議論して、それであなたの呪われた大きな訴訟事件に、すばやく片をつけようとしてもしてなさるのかね？ われわれは身分の低い雇われ者なんで、身分証明書など見たところでわけがわからぬし、あなたの事件とかかわりあいといったら、毎日十時間あてあなたのところで見張りをし、その分の給料を貰うというだけのことなんだ。これがわれわれの全部というもんさ。ただしかしおれたちにも、おれたちの勤めている高級の役所では、こんな逮捕を行う前に、逮捕の理由や被逮捕者の人物などについて、きわめて正確に調査をすることぐらいはわかつているんだ。その調査には誤りなんかこれっぽっちもありやしない。おれの知っている限りじゃあ、そしておれの知っているのはいちばん下っぱの階級の者だが、われわれのお役所は、民衆の中に罪を探しまわるなんていうまねはしていないんで、法律にもあるとおり、ただ罪によってひきつけられるだけなんだ、そしてそのためにわれわれ監視人を送ってよこさねばならなくなる。これが法律というもんさ。どこにいったい間違いがあるというんだね？」

「そんな法律は知らないね」とKは言った。

「知らないだけあなたの損さ」と監視人が言った。

「そりゃあまたあなたがたの頭にだけある法律でしょうよ」とKは言い、とにかく監視人たちの考えていることの中にそつと入りこみ、その考えを自分に有利なようにしむけるか、逆にその考えに同化してみようとした。しかし監視人はただ拒むようにこう言った。

「そのうち目にもものを見せたらもうさ」

フランツがくちばしを入れて、

「見ろよヴィレム、奴さんは法律を知らぬと白状しながら、同時に無罪だなんて言いはっているんだ」

「お前の言うとおりさ、でもこの男に分らせてやるなんてのは、金輪際無理だよ」ともう一人のほうと言った。

Kはもう返事をしなかった。こんな下っぱの連中——彼ら自身がそう認めているのだ——とおしゃべりして、これ以上頭を混乱させる必要はないではないか、と彼は思った。だって明らかにこの二人は、自分自身でもわけのわからぬことをしゃべっているのだ。妙に確信を持っているの、ただ連中が阿呆なためなのだ。自分と同等の人間と二言三言話しさえすれば、こんな連中と百年話をするよりも、万事比較にならぬほどはつきりすることだろう。彼は部屋の中のあいた場所を二度三度行ったりきたりした。向いの窓には例の老婆の姿が見えたが、この老婆は自分よりもっとずっと年をとった老人

を、窓のところにひっぱってきて、これを抱きかかえてやっているのだった。こんなふうに見世物になるのはやめねばならない。

「上役のところ连接到いてくれたまえ」と彼は言った。

「上役のお声がかかったならばだ、それまではだめだ」と、ヴィレムと呼ばれた監視人が言った。「ところで忠告しておくが」と彼はつけ加えて、「部屋にもどって、静かにし、指令を受けるまで待ったがいいね。とりとめもなくいろいろなことを考えていないで、ちゃんと気をしっかりさせておくんだ、あなたに対してはとてつもない要求が出されることになろうからね。あなたのわれわれに對する扱いときたら、こりゃあもとても親切のお返しをしてあげられるようなものじゃあなかった。あなたは忘れているんだが、おれたちは相も変らぬつまらぬ者ではあるうが、でも少なくとも今あなたに対しては、自由な人間なんだぜ。これはちつとやそつとの優位じゃあないんだ。しかしそれでも、もしあなたに金があるのなら、まあ向うの喫茶店から軽い朝食ぐらいはもってきてやってもらいたいね」

こんな申し出には返答をしないで、Kはしばらくのあいだじつと立ったままだった。自分が次の部屋のドア、いや、さらに控室のドアをあけても、この二人にはそれを阻止することは全然できないだろう。ひょっとすると、こうして極端なことをしてかしてみろというの、いちはば簡単な事の解決法かもしれない。でもやっ

ぱりこの二人は描みかかってくるかもしれない、もしいったんこちらがぶち倒されてしまえば、今ならまだある点でこの連中に対して保持している優位も、みんな失われてしまうのだ。そんなわけで彼は、事の自然な成行きから生じてくるにちがいない安全な解決法のほうをえらんでとり、自分の部屋にもどったが、彼のほうからも監視人たちのほうからも、もうそれ以上一言も言わなかった。

ベッドに身を投げると、彼は洗面台から、昨夜朝食のために用意しておいたきれいなりんごをとった。このたった一つのりんごが今は彼の朝食というわけだが、それでも、あんぐりと一口嚙んで確かめてみたところ、これは監視人たちが恩きせがましく取りよせてくれる、うす汚い深夜喫茶の朝飯などより、ずっとましだった。気分がよくなり、自信もわいてきた。今日の午前は銀行を休むことになるが、比較的高い地位にいるのだから、弁解するのは簡単だった。その弁解にはんとうのことを言うべきだろうか？ そうすることにしよう。自分の言うことを信じてもらえないときには——こんな場合にはそれももつともないのだが——、グルーバツハ夫人を証人に立てることもできるし、場合によっては、向いの二人の老人でもいい。きつとこの二人は、またこの部屋と真向いの窓に向つて、行進中のことだろう。どうも不思議に、いや少なくとも監視人たちの思考過程から言つて不思議に思えたのは、彼らが彼を部屋に追いもどし、

ここにたった一人でおいておくことだった。なぜといって、ここは自殺しようとするば、いくらでもその方法があるではないか。もつともそう思うと同時に、今度は自分の思考過程から、自殺するとしたらいったいどういう理由がありうるのだろうか、とも自問してみた。まさか隣りの部屋にあの二人が居坐つて、彼の朝飯を平らげてしまったから、というわけにはゆくまい。自殺するのはどうもあまりにばかげていて、たとえ自分がそうしようと思つたところで、そのばかばかしさのために、自殺できなくなつてしまつただろう。監視人たちの知能程度があれほど目立って低いものでなかつたならば、彼らもやはり同じような確信をいだいていたために、おれを一人にしておいても何の危険もないと考へたのだ、とそう取ることもできたのだが。連中に今その気さえあれば、これが見えるところなのだがと思ひながら、彼は上等のブランデーを入れてある小さな押入れのところにいき、最初はまず一杯朝飯のかわりに乾し、二杯目は勇気をふるいたせるためときめたが、しかしその二杯目は、そんなことが必要になる、ありそうにもない場合のことを考へ、ただの用心のためだった。

とその時、隣りの部屋からいきなり呼びかけられて、彼はひどく驚き、ガラスに歯をぶつけてしまつた。

「監督のお呼び！」というのだ。

彼を驚かせたのは、たんにその呼び声だった。短い、ぶつきた、軍隊式の呼び声で、とても監視人フランチのものととは思へなかつた。命令そのものは大いに歓迎すべきものだったのである。

「やつとのもことで！」と彼は呼び返し、押入れの戸をしめて、すぐに隣りの部屋へと急いだ。そこには二人の監視人が立つており、まるで当然のことのように、彼をまた部屋へ追い返した。

「なんということだ？」と二人は叫んで、「寝巻のままで監督の前に出ようつていうのか？ 監督はお前をぶちのめさせて、しかもおれたちまで巻添えだ！」

「行かせろつたら、畜生め！」とKは叫んだが、もう洋服筆筒のところまで押しもどされていた。「寝込みを襲つておいて礼装してゐるなんて言えた義理か」

「なんと言つたつてだめだ」と監視人たちが言つたが、この二人はKが呼び声をたてたたびに、静かに、というよりはほとんど悲しげになり、そのために彼の気持を混乱させたり、あるいは逆に、正気にもどらせたりもするのだった。「こつけいしごくな仰山さじやないか！」と彼はなおも不平をならしたが、それでも椅子から上衣をとつて、監視人の判断を求めでもするかのように、それをしばらくのあいだ両手でささえていた。二人は頭をふつた。

「黒の上衣でなくちゃあだめです」と彼らは言つた。それに答えるようにKはその上衣を床に投げ出すと、こう言つた——どういう意味で言

ったのは、自分でもわからなかったが――。

「だってまだ本審理じゃあないじゃないか」

監視人たちは微笑を浮かべたが、意見を変えはしなかった。

「黒の上衣でなくちゃあだめです」

「そのほうが手つとりばやいというのなら、それでもいいさ」とKは言い、自分で洋服筆箆をあけると、長いことかかってた皆さんの洋服をかきまわし、いちばんいい黒服を選び出した。

短い上衣の黒服で、腰恰好がいいといって知人たちのあいだに評判をとったほどのものである。

ワイシャツも別のをひき出し、入念に服を着だした。彼は内心ひそかに、事を早めることができたのは、監視人たちが風呂に入れと強制するのを忘れてしまったせいだ、と思った。それでもまだそのことを思いだすかもしれないと、彼ら二人を観察していたが、もちろんそんなことは二人とも夢にも思い浮かべず、そのかわりに

ヴィレムが忘れなかったのは、Kが服を着ているという報告をもたせて、フランクを監督のところにやることだった。

すっかり服を着てしまうと、ヴィレムのすぐ前を歩いて人気がない隣りの部屋を通りぬけ、次の部屋に行かねばならなかった。もうドアの両扉とも開かれていた。この部屋は、Kもよく知っているのとおり、しばらく前からタイピストのビュルストナー嬢が住んでいるのだが、朝非常に早く仕事に出かけるのが常で、夜はまた遅く帰るため、挨拶の言葉以外にあまり話をした

ことのない女だった。今はベッドの傍の小机が審理用の机として、部屋の中央にもち出され、監督はそのうしろに坐っていた。両脚を組み、片方の腕は椅子のひじかけにのいていた。

部屋の片隅に三人の若い男が立ち、ビュルストナー嬢の写真を見入っていたが、その写真は壁にかけたマットの一つにとめてあった。開いた窓の把手には一枚の白いブラウスがかがついていた。真向いの窓にはまたまた例の二人の老人が見えたが、今度は仲間がふえて、彼らのうしろにずっと背の高い男が、シャツの胸をはだけたまま立っており、赤っぽいとんがりひげを、指でおしたり、ひねったりしていた。

「ヨーゼフ・Kだな？」と監督はたずねたが、これはただKの散漫な視線を自分に引きつけるためだったようである。Kはうなずいた。

「今朝のいろいろな出来事で非常に驚いたでしような？」と監督はたずね、そのさい両の手で、小机ののっているわずかばかりの品物をおしのけたが、それはマツチとろうそく、本一冊に針刺して、まるで彼が審理に必要としている品物でもあるかのようにだった。

「ええ」とKは言ったが、やっと思いのわかった人間に相對して、その男と自分の事件について話し合えるのだ、という快感が彼をとらえた。「ええ、驚きはしましたが、非常にというわけではありません」

「非常にというわけではない？」と監督はたずね、ろうそくを小机のまん中に立て、他の品物

をそのまわりによせ集めるのだった。

「私の言葉を誤解なさったかもしれませんが」とKはせきこんで言った、「私が申しましたのは――とここで中断し、椅子はないものかとあたりを見まわした。

「坐ってもよろしいでしょうね？」と彼はたずねた。

「そういう慣例はありませんな」と監督が答えた。

「私の申しましたのは」と今度はKは間をおかずに言った、「なるほど私は非常に驚きはしたが、しかし人間この世で三十にもなり、私の運命のように、独力でこれまで切り抜けてこなければならなかったとなれば、不意打ちなどに対しては、もう十分にきたえあげられ、そうそう辛いことも思わぬものだ、ということなんです。とくに今日の不意打ちなんかはそうですね」

「なぜまたとくに今日のがそうなんです？」

「この件全体を冗談事だと思っている、というわけではないんです。だって冗談にしちゃあ、道具立てがでかすぎますからね。この下宿の住人全部がそれに参加してるようですし、それにあなたがた全部もそうだとすれば、これはもう冗談事ではありませんよ。ですから、冗談だとは言わぬつもりです」

「そのとおり」と監督は言って、マツチ箱の中にマツチが何本あるかを検討していた。

「しかしまた一方」とKは言葉をつづけ、みんなのほうに顔を向けて、写真のところに三

人もこちらを向けばいいのとさえ思いながら、「しかしまた一方、この件はそう重要なものであるはずがないのです。なぜそう推論するかといえば、私は告発されているというのに、私には告発されるほどのほんの僅かな罪さえ見当たらないんです。しかしまあこれも枝葉末節のこと、いちばん大切な問題はこれです。私はだれによって告発されているのか？ いかなる役所が審理を行うのか？ あなたは役人ですか？ だれ一人として制服を着ていない、その服を」——とここでフランツのほうにむき——「制服と呼ぶのは少し無理で、旅行服といったほうがあたっていますからね。こうした質問に私ははっきりしたご返答を要求するものです。それさえはっきりさせることができれば、お互いに心からの握手をして、別れることができますと確信してますよ」

監督はマッチ箱を机の上に投げつけた。

「あなたは大変な間違いを犯しておられる」と彼は言った、「ここににいるかたがたと私とは、あなたの事件にとってみれば、まったく取るにも足らぬほどのものなのです。いや、そればかりか、われわれはあなたの事件についてはほとんど何も知らないのです。なるほどわれわれはきちんとした規則どりの制服を着ることもできますが、われわれが制服にしたからといって、あなたの件が工合が悪くなるということもないのです。また私はあなたに、あなたは告発されているのだ、などとも全然言えないのです、

いや、むしろ、あなたが告発されているのかどうか、それさえ私は知らないのだ。あなたは逮捕されている、それは確かです、しかしそれ以上のことは私は知りません。監視人たちが何か他のことをおしやべりしたかもしれないませんが、それは文字どおりただのおしやべりだったわけです。しかし私は今こうしてあなたの質問に答えてはいませんが、それでも私はあなたに対して忠告はできるわけで、どうかわれわれのことや、あなたの身に起こるだろうことなどに、その頭を悩ませないで、むしろあなた自身のことを考えてほしいのです。そして、自分が無罪だという感情でこんな騒ぎをひき起こさぬことですな。そう悪くもない印象を与えているあなたなのに、これはご損というものです。またおおよそ弁舌の点でも、もつと挫え目になさるがいいので、あなたがさきほど話して聞かせたことは、ほとんど全部、あなたがほんの二言三言に止めておいたところで、態度からも推定できたことなんです。のみならず、それはあなたにとってそうひどく有利なことでもなかったのですよ」

Kは監督の顔を見つめた。自分より若そうな男からここで説教をくうというわけか？ こちらがあげすけに話してやったおかげで、叱責をうけるというわけか？ そして、逮捕の理由や令状の出所については、何も聞けないというわけなのか？ 彼は一種の興奮状態におちいり、行ったりきたり歩いて——これはだれも妨害しなかった——、カフスをおし入れてみたり、胸のところにさわったり、髪をなおすようになでたりし、三人の男たちのところを通り過ぎながら、「無意味なことだ」と言ったが、三人はこれに聞いて彼のほうにむきなおり、意を迎えるようにはあるが、しかし真面目くさった顔つきで、彼の顔をじつと見つめるのだった。ついにまた監督の机を前にして立ちどまると、

「検事の手スレーラとは呢懇なんだが、電話してもよろしいでしょうね？」と彼は言った。

「いいですとも」と監督は言い、「ただそれにどんな意味があるのか、私にはわかりません。何か個人的な用件で彼と話をしなくちゃあならない、ということでしょうな」

「どんな意味があるのかだつて？」とKは叫んだが、腹を立てたというより狼狽していた。

「いったいあなたは何者なんです？ 意味があるかなどと言いながら、この世に存在する限りの、もつとも無意味なことを演じているというわけですか？ これはどうもあわれなほどじゃありませんかね？ このお二人がまず私を襲撃したわけだが、今はこのまわりで坐ったり立ったりして、この私にあなたの前で高等馬術をやらせているんです。私を逮捕したと申し立てているくせに、検事に電話することに何の意味があるのですって？ よろしい、それじゃあ電話はかけますまい」

「いやどうぞ」と監督は言って、電話のある控室のほうに手をのびしながら、「どうぞ電話をおかけください」

「いいや、もうその気はありません」とKは言
い、窓のところへ行った。

向いではまだ例の連中が窓ぎわに陣取ってい
たが、Kが窓のところへ歩みよつたので、今は
じめて、落ちついて見物していたのを乱された
といった様子である。老人たちは身を起こそう
としたが、うしろの男がこれを制した。

「あそこにはまたあんな見物人がいるんだ」と
Kは監督に向つて大声で叫び、人差指でおもて
をさした。それから、

「そこからだけ！」と彼は向うに叫んだ。

三人の者もすぐ二、三步ひきさがり、その上
老人たちが男のうしろに廻つたのを、この男は
幅のひろい身体で隠してやり、口の動きで察す
るところ、何か遠いためにわけのわからぬこと
を言っているらしかった。しかし連中はすつか
り姿を消してしまつたのではなく、気づかれず
にまた窓のところに近づくことのできる瞬間を、
待っている様子だった。

「あつかまし無遠慮な奴らだ！」とKは言
ながら、また部屋のように身を向けた。Kが横
目で見ると、監督は彼の言葉に相槌をうってい
るようにも思われた。しかし、また、全然聞い
ていなかったようでもあり、それというの、
監督は一方の手をしっかりと机におしつけ、そ
れぞれの指の長さを比べてみている様子なのだ。
二人の監視人は飾り覆いのかけてあるトランク
の上に坐り、膝をこすっていた。三人の若い男
は両手を腰にあて、あてもなくあたりを見廻し

ていた。どこかの人気のない事務所のように静
かだった。

「ところでみなさん！」とKは叫んだが、一瞬
この部屋にいる全部の人間を彼の肩になつて
いるかのように思われた。「みなさんの様子か
ら察するに、私の件は終つたとしてよろしいよ
うですね。私の見解では、あなたがたの処置が
正当であるかないかは、もう考えないことにし
て、お互いに握手を交わしてこの件に円満な決
着をつけるのが、いちばんいいようです。あな
たも私と同じ見解でしたら、どうか——」

そう言つて監督の机に歩みより、握手のため
の手をさし出した。監督は目を上げると、唇を
かんで、さし出されたKの手を見た。Kはまだ
監督が手をさし出してくるものと思つていた。
しかし監督は立ち上がり、ビュルストナー嬢の
ベッドの上にあつた固くて丸い帽子を取りあげ、
新しい帽子を試してみるときのように、これを
用心ぶかく両手かぶるのだった。

「あなたには万事がいつも簡単に見えるのです
な！」と彼はKに向つて言つた。「事に円満な
決着をつけなくちゃあならんとね？ いやいや
そうはほんとうにいいかないんです。かといつて
私は、あなたに絶望しろと言つても全然
ありません。絶望なんてとんでもない。あなた
は逮捕された、というだけのことなのです。そ
れをあなたに言うのが私の任務でしたから、そ
れを果たし、あなたがそれをどんなふうを受け
入れたかということも、今この眼で見たわけで

す。これだけで今日のところは十分ですから、
もうお別れできますよ。もっとも、さしあたつ
ては、というだけですがね。さてそうなるとも
う銀行に行きたいとお思いでしょうか？」

「銀行へですつて？」とKはたずね、「私は逮
捕されたのだと思つてましたよ」

Kは一種の反抗心でたずねた。というのも、
彼が握手のためにさし出した手は受けいれられ
なかつたが、それでも彼は、自分がここにいる
すべての人間からますます独立したものになつ
てゆくを感じたからである。とくに監督が立
ちあがつてからはそうだった。彼は連中といつ
しよになつて遊ぶ氣だった。連中がもしここを
立ち去るようなときには、門のところまで追
いかけて行つて、私の逮捕をどうしてくれるの
ですか、と言つてやるつもりだった。それで彼は
こうくり返した。

「私は逮捕されているんですから、銀行になん
か行けるはずもないでしょう？」

「ああ、そうか」と監督はもうドアのところ
で言つた。「あなたは私の言つたことを誤解した
んです。あなたは逮捕されている、確かにそう
だ、しかしだからといって、それはあなたが職
務を遂行するのを妨害するわけではないのです。
生活も今までどおり普通に行いていかまわな
いのです」

「それじゃあ逮捕されているのもそう悪いこと
じゃあないね」とKは言い、監督に近づいて行
つた。

「悪いことだと言ったためしは一度もありませんよ」と監督は言った。

「しかしそれじゃ逮捕の通知だって、たいして必要じゃあなかつたと思いますがね」とKは言い、もつと近くへ寄つて行つた。他の連中も近よつてきた。みんながドアのそばのせまいところにより集つた。

「それが私の義務だつたのです」と監督が言つた。

「ばかげた義務だ」とKは負けずと言ひつた。

「そうかも知れませんが」と監督は答へ、「しかしこんなことを言ひつゝ時間つぶしはしますまい。私はあなたが銀行に行きたがつていると思つていたのです。どうもあなたは人の言葉のはしはしにまで気を回すようですから、こうつけ加えておきましょう、私のほうには無理にあなたを銀行に追いやる気は全然ないんで、ただあなたが行きたがつていてと思つていただけのことなのです。そして、出かけやすくもし、また銀行に着いたときにはできるだけ人目に立たぬようにと、そういうあなたのお役に立てるために、私のほうではこの三人のかたがた——あなたの同僚のかたですが——をお連れしてあるのです」

「ええ？」とKは叫び、驚いてその三人の顔を見つめた。この、およそ特徴のない、貧血症の若者たちは、彼としてみれば今もつて写真のそばにいた一グループとしての記憶しかないのだが、それがまたまごうかたなく彼の銀行の行員

だつたのだ。同僚ではなかつた、これは言い過ぎというもので、監督が何でも知つていそうではないが、じつはそこに穴があるのを証明してゐたが、しかしとにかく銀行の下僚であるにちがひなかつた。どうしてこれに気がつかなかつたのだろうか？ この三人に気がつかなかつたとは、それほど監督と監視人とに気がとられていたのだらうか！ なるほど見れば、体がこわばり、両手を振り動かしているラーベンシュタインだし、目のおちくぼんだブロンドのクリヒだし、慢性の筋肉緊張のため、いやなうす笑いをうかべているカミナーではないか。

「おはよう！」とKはしばらくしてから言い、しやちほこばつて頭をさげる三人に手をさし出した。

「あなたがたととはさつぱり気づかなかつた。さあそれじゃあ仕事に出かけようか？」

三人は今までずつとこれ待ちもつてゐたかのように、笑いながら熱心にうなづいた。ただKが、自分の部屋においたままで帽子がないのに気がついたとき、これを取りに三人ともつづいて走つて行つたが、その様子を見ると、何か彼らの当惑ぶりがわかるのだった。Kはじつと立つたまま、開いた二つのドアを通して、三人の後姿を見おくつていたが、どんじりはもちろん、どうでもいい気のラーベンシュタインで、これはただ粋な跑足をやって見せてるだけだった。帽子を渡してよこしたのはカミナーだったが、Kは自分自身に向つて——もつとも

銀行でもよくそうする必要があつたのだが——、カミナーのうす笑いはそのつもりでやつてゐることではないのだ、いやそれどころかこの男は、おおよそ意圖して微笑するなどはできないのだ、とはつきり言つて聞かせなければならなかつた。控室ではグルーバツハ夫人がみんなのために玄関のドアをあけたが、そうたいして悪いことをしたとの様子も見せず、Kが見おろすのは、いつものように、太つた胴体に不必要に深く食いこんでいる彼女の前かけのひもだった。

街にでるとKは時計を手にして、自動車に乗りうと決心した。もう半時間も遅刻しているの、これ以上不必要に遅れたくはなかつたのである。カミナーが自動車を拾いに街角まで走つてゆき、他の二人は明らかにKの気をまぎらそうと努めてゐるようで、クリヒが突然向い側の門を指さして見せるのだった。その門にはちやうど今、例のブロンドのとながりひげのある大男が姿をあらわし、こうして今全身をあらわにしてしまつたことに、最初の一瞬はちやつと狼狽したが、家壁のところに身をひくと、そこに寄りかかるのだった。老人たちはおそらくまだ階段を降りてくるところなのであらう。Kはクリヒが、人もあらうに自分が前に見もし、出てくるだらうと予期さえてゐたその当の男を、わざわざ気づかせて見せたことに腹を立てた。

「見るんじゃない！」と彼は叫び、一本立ちになつた男たちに向かい、こんな話し方をすれば、それがどんなに眼に立つことかには気がつかない

かった。しかし説明する必要もなかった。ちょうど自動車が行ってきたからで、三人ともこれに乗って走り出した。とKは、監督と二人の監視人が立ち去ったのに自分が全然気づかなかつたことを思い出した。監督のおかげで三人の行員に気づかず、今度はまた行員たちに気をとられて、監督から眼を放してしまつたのだ。どうもこれではそう感心した気の配りようとは言えなかつたので、こんな点は、もっと正確に観察しようとしてKは決心した。しかし彼はなおも思わず知らずのうちにうしろをふり向き、もしやして監督と監視人の姿がまだ見えないものかと、自動車の背から身をのり出してみた。しかしすぐにまた向きなおし、車のすみに気持よく身をよせて、だれかを探すことなどは結局試みてもみながつたのである。そんな様子は見せなかつたが、今こそ慰めの言葉の一つもかけてもらいたいく所であつた。ところがもう連中は疲れた様子で、ラーベンシュタイナーは車の右クリヒは車の左をながめ、カミナーだけが例のとおり顔をゆがめて笑いながら、お相手の用意をしていたが、こんな笑い顔を冗談の種にするのは、残念ながら人情の禁じるところであつた。

この春、Kが毎晩どんなふうにすごしてたかといへば、仕事のあと、まだそれができればのことだつたが——というのも、彼はたいてい九時まで事務室に坐つていたのである——、一人か、あるいは他の行員たちといっしょに、

ちよつとした散歩をし、それからビヤホールに行つて、その常連——中年の紳士が多かつたが——のテーブルにつき、その連中と普通は十時まで仲間になつて坐つていたのである。しかし、こういった時間の区切り方には、また例外もあつたわけで、たとえば、彼の仕事ぶりと信頼性を非常に高く評価していた銀行の支店長から、ドライブにさそわれたり、別荘での夕食に招待されたりした場合がそうだつた。その他にKは一週に一度、エルザという娘のところにかけて行つたが、これはある飲み屋で、夜は夜どおし朝おそくまで、給仕女として働き、日中はいつもベッドに寝たまゝ訪問を受ける、といった女であつた。

しかしこの晩だけは——昼間は仕事に追われ、また誕生日だというので、たくさんの人々から敬意と友情をこめたお祝いを言われているうちに、たちまち過ぎ去つてしまつた——Kはすぐ家に帰ろうと思つた。昼間の仕事の合間には、いつもそのことを考えていたのだつた。何が起きたともはつきりつかめなかつたが、今朝の出来事のせいで、グルーバツハ夫人の下宿全体に何か大混乱がひき起こされているような気がしてならず、また、その秩序回復には自分がなくてはならぬもののように思えたのである。しかしこの秩序さえうち立てられれば、今朝の出来事の痕跡はみんな消え去つてしまひ、すべてがまたもとどおりの鞆におさまることにならう。とくに例の三人の行員には、何ら心配すること

もなかつた。彼らはまた大勢の行員の中にうずもれてしまひ、その動静には何の変化も認められなかつた。目的はただ彼らを観察することにあつたのだが、Kはよく彼らを単独で、あるいは束にして、自分の事務室に呼びつけてみた。結果は毎回満足して、彼らを放免してやることでできたのである。

夜の九時半に、彼の住んでいる家の前についてみると、門のところで一人の若僧に出あつたが、この男はそこに足をひろげてふんばり、パイプをふかしているのだつた。

「どなたです？」とKはただちにたずね、顔をその若僧に近づけたが、玄關のうす暗がりの中では、あまりよく見えなかつた。

「この家の管理人の息子ですよ、旦那」と若僧は答え、パイプを口から取つて、道をあけた。

「管理人の息子だつて？」とKは聞きかえし、いらだちながらステッキで床をたたいた。

「旦那は何かご用なのですか？ 父を呼んでみましょうか？」

「いや、いや」とKは言つたが、彼の声の調子には、何か人をゆるしてやっているようなところがあり、まるでその若僧が何か悪いことをしたかしたが、こちらはそれを勘弁してやっていると、とても言いたげだつた。それから彼は、「いいんだよ」と言い、先に歩いて行つたが、それでも階段をのぼる前には、もう一度ふり向いてみたのである。

まっすぐ自分の部屋に行くこともできたが、